人としてのT・S・エリオット[1]

角倉康夫

一

エリオットは元来、内気な人のようである。そのように生れついたのかもしれないが、彼の生い立つた家庭環境はまた、そういう性格を形成もしくは助長する底のものであつたと思われる。

彼は七人きようだいの末つ子である。七人きようだいといつても兄はただ一人、他は姉ばかりである。また彼は、父、四十七歳、母、四十五歳のときの子であり、相当年輩の両親の末つ子のこととて、とりわけ愛育されたとのことである。

エリオット家は清教徒的で、飲酒、喫煙とは無縁であつた。が文学、美術を無視したり、反視したりすることなく、[2]家族の人々は文学的心情の持主であつた。エリオットの母がサボナローラを主題とする詩劇の作者であることは周知の通りである。彼の父は夜、子供たちにディケンズを読み聞かせ、子供たちはこれに熱心に耳を傾けたものであつた。彼自身は七・八才の頃、ワシントンの伝記を書き、*Fireside* という家庭回覧雑誌を編集したりした。彼をとりまく文学的な雰囲気と心情とは彼の文学的素質とその育成とを物語るものではあるが、それはまた彼の性質を内向的にするに役立つたであろう。

かくして幼いエリオットはひ弱い、物静かな子供であり、友人が戸外で遊ぼうと誘いに来た時には、大きなひじ掛けいすにうずくまり、読書していることが多かつた。彼の父は実業家であつたが、祖父は First Unitarian Church（ミズーリ州セント・ルイス市）の牧師であつた。その祖父の教会にいつていたのでは世の荒波を乗り切る人間にはなれない——そう考えた彼の保母は家から一ブロック離れた、彼女の属する Irish Catholic Church へ彼をつれていつたとのことである。

内気であれば自己の気質にそぐわない経験を回避し、人間的錬成の機会を逸することになる、だから内気克服のための鍛錬が必要である——このことをエリオットは早くから知つていた。そこでつとめてダンスやパーティに参加し、ボクシングの練習[3]もした。嫌なこと、苦しいことを敢てし、自己を訓練しようというのが彼の考え方である。こういう考え方は後年彼の書いたものの中にも散見される。たとえば、discipline of culture を説くが、discipline of suffering は説かないとてアーノルドに不満の意を表明したり、[4] 得意でない課目に興味を抱くようになるのが教育の一部だと主張したり、[5] 或は英国人が浪漫主義、古典主義のいずれを選ぶべきかを決定するに当つて考えなければならぬことは「何が我々にとつて自然であるか」ということではなく、「何が正しいか」ということだと論ずるが如きである。最少抵抗線をえらぶのはエリオットのとるところではない。

内気克服というけなげな目的をもつた自己訓練とはいえ、気のすすまぬことをするのは苦痛であることに変りはない。エィキン（Conrad Aikin）はそれにまつわるほほえましいエピソードを紹介しているが、そういう苦しい訓練までして、所期の目的は達せられたろうか。訓練の効果はさておき、W・ルーイスは第一次世界大戦は人間エリオットを鍛錬し、変化させたという。またノーラ・ヴィーデンブルック（Nora Wydenbruck）は元来内気であるが、その内気に打ち勝つているエリオットの成熟した姿を次のようにつたえている。

天才の個性は偏ぱな発達をとげ、人はそれに圧せられて敵意を催すことがしばしばある。エリオットはしか

し、社交性を円満に発達させ、正反対の性格の人とでもすぐに打ちとけ、共感、ほのぼのとした親しさ、くつろぎの感じをかもすことができる。

彼から聞いた所によると青年時代の彼は極端に内気であつたというから、このことは一層驚嘆に価する。外の人は皆お互に知りあいだが、彼だけが誰とも知りあいでない、そういう大勢が集つている室へ入るのは彼には今日でも苦痛である。内気な人は我々にいやな思いをさせる。我々をも当惑したような気持にさせてしまうか、はにかみをかくすために我を張るからだ。内気――自意識の誇張されたものに外ならぬ――は自己を忘れることによつてはじめて克服されるものだ、そしてこの偉大なキリスト教詩人から発散する魅力の秘密はそこにあるのだと私は思う。

二

ヴィーデンブルックもいうように、内気な人はしばしば他人に不快な思いをさせる。しかし内気な青年エリオットは魅惑的な、人好きのする人であつた。彼は第一次世界大戦が始まる直前の夏のはじめをドイツで過し、戦争が始まるとともにやつとの思いでロンドンに辿りついた。その頃、ルーイスはパウンドの寓居ではじめてエリオットに会つた。ルーイスはエリオットのその頃を「ジョコンダ期」(the 'Gioconda' period) といつている。

ルーイスの所謂「ジョコンダ期」のエリオットは一体どんなエリオットだろうか。はじめて見たエリオットの印象をルーイスは次の如く語る。

室内に入ると……見るからに好印象を与える見知らぬ人がいた。握手をかわす時、その人は太い、低い、悲しげな声で挨拶の言葉をのべた。アメリカ人だ。私の目をひいたのはすんなりとした恰好のよい首、私がかつて他の所で「ジョコンダの微笑」とかいた微笑。女性的な感じはなかつた――何しろ身体が上きい上に、男性的な個

性の持主であることがはつきりとよみとれた。しかしその赤みがかつたくろい皮膚には笑くぼがうかんでいた、そしてたしかに、レオナルドの描いた人物に稍似た目のつかい方をした。当時の彼はまことに魅惑的な容姿の持主であつた。それは大西洋のこちら側では滅多にお目にかかれぬものだつた。

こういう次第でルーイスはこの青年と'I am growing old, I am growing old,[7] / I shall wear the bottoms of my trousers rolled'とうたつた詩人とを結びつけるのに困惑したが、とにかく彼が気に入つたとのべている。

エィキンもまたハーヴァード時代のエリオットを「不思議に魅力のある、背の高い、スマートな風采の青年」といつている。また、ルーイスが「ジョコンダの微笑」といつているものと同じものをさしているのであろう、エリオットの微笑を somewhat Lamian と形容している。

とにかく青年エリオットは会う人毎に極めて好印象を与え、直ちにその好意をかち得たことは単にルーイスの場合だけではなかつたようである。クライヴ・ベル (Clive Bell) もエリオットとの初対面の時（一九一六年頃）、彼が非常に気に入り、すぐその場で友人に紹介しようと決心したといつている。ベルは程なくエリオットをV・ウルフとロジャー・フライ (Roger Fry) とに紹介したところ、前者は最初から彼に好意を抱き、後者は興奮し、熱狂的な態度を示したとのことである。序ながら、ベルによると、フライは興奮すると建設的になる人であり、エリオットにすすめて *The Waste Land* のあの自註を書かせたのは外ならぬこの人である。

エリオットを語るベルの文章は題して *How Pleasant to Know Mr Eliot* という。そのエリオットは青年エリオットであり、ルーイスの所謂「ジョコンダ期」のエリオットである。エリオット先生についての不愉快な思い出は全然ないと彼の教え児の一人ジョン・ベッチャマン (John Betjeman) が書いている若い日のエリオットである。そういう頃の彼はいかにも魅惑的な、人好きのする人であつたとしても、後年の彼はどうであろうか。ベッチャマンは三十年前と今日とではエリオットは少しも変つていないという。しかしルーイスは第一次大戦後あつたエリオットは例

の「ジョコンダ期」を遠い過去のものとしているという印象を与えたといい、一九三〇年代の後期のある時の「疲労困憊した亡命者のような顔」をしたエリオットの姿を記録し、このような姿は若い頃の彼には見られなかつたとのべている。さらにエミリオ・チェッキ(Emilio Cecchi)は六十歳に近いエリオット[8]を次のように描写する。

実際に会つて見るエリオットは写真から想像していたよりも長身であつた。そして恐らくはもつとやせていたろう。しかし病弱とは見受けられなかつた(聞けば身体をいためているとのことだつたが)。私がそれまでに会つた詩人……の中、彼の態度ほど詩人或は芸術家のそれらしくないものはなかつた。彼にはむしろ化学者或は言語学者といつた風格があり、そういう科学的研究の訓練にともなうあの知的貴族主義及び孤独性がうかがわれた……彼には聖職者を思わせるものがあつたといつて差支なかろう。

エリオットの写真を見、その詩や評論を読んで私の心にうかぶのはルーイスの所謂「ジョコンダ期」のエリオットではなく、むしろチェッキの語る端正、謹厳にして近より難いエリオットである。とすれば How unpleasant to meet Mr. Eliot! / With his features of clerical cut, / And his brow so grim / And his mouth so prim / And his conversation, so nicely / Restricted to What Precisely / And If and Perhaps and But. / How unpleasant to meet Mr. Eliot! とエリオットのよむエリオット氏は後年の彼の真実をつたえる自画像でもあろうか。

しかしベッチャマンはいう。

あの荘重な詩や評論、あのしかつめらしい顔はエリオットを知らぬ人をして彼がユーマーのない人間であると想像させるかも知れぬ。しかし彼は極めて滑稽な、おどけの、面白い人である。

又、タイム誌の記事によれば、彼は友人達にとつては不快な人間ではなく、「思いやりのある、おじさんのような愛情のあるいたずら者」であり、友人達は彼をTom或はOld Possumと呼び、彼自身も自らのことをTomという。

デズモンド・ホーキンズ(Desmond Hawkins)は若輩の頃、はじめて会うエリオットが自分のことをold Tom Eliotと称するので、その心安さ、親しさにうたれたといつている。ただタイム誌の記事中気になるのは「友人達にとつては」という文句である。即ちこの記事はエリオットがある人達にとつては不快な存在だということを前提としているように感じられるからである。事実そういうことはあるのであろう。それはとにかくこのold Tom Eliotは猫のうたをつくつて友人の子供を喜ばせる。又、友人への手紙の宛名を詩の形式で書くのが好きである。一例――O stalwart SUSSEX postman, who is / Delivering the post from LEWES, / Cycle apace to CHARLESTON, FIRLE, / While knitting at your plain and purl, / Deliver there to good CLIVE BELL, / (You know the man, you know him well, / He plays the virginals and spinet) / This note — there's almost nothing in it. このユーモラスな宛名は郵便屋さんを満悦させたとベルはいつている。

前項と同じく本項をもヴィーデンブルックの言葉で結ぼう。

リルケは世間話ができず、会話が当意即妙の、火花を散らすような応答で表面をかすめて進んでいく場合はいつも、別世界から来た人のように押し黙つていた。エリオットは違う。彼にはユーマーの感覚があり、それが自在に発揮される、又、人の気持を鋭敏に察知する如才なさがある、そのためどんな話題についても、彼の会話は才気縦横である。彼と対座しているといつも、人は彼の深い、精密な、鋭い知性、天才の力を意識する、それにも拘らず、くつろいだ気持になり、大いに笑い興じ、とりとめもない事をも楽しむことができる。

三

エリオットは聰明な人である。彼は詩人として有名でなくても、非常に聰明な人として有名になるだろうとベルはいう。

彼は一九〇六年、ハーヴァードに入学、三年でB・A・となり、その次の一年でM・A・をとつた。[9] 四年の課程を三年で終えたからといつてあえて頭がよいというのはあたらないにしても、タイム誌によれば、彼は決して書物ばかりにしがみついている勉強家ではなかつたし、ベルによれば、B・ラッセルが「ハーヴァードにおける私の最優秀学生」と折紙をつけたそうだからとにかく非常な秀才であつたのだろう。

彼の頭のよさは会話の際にもつともよく発揮される、しかしそれが意外の時に発揮されて人を喜ばせたことがあるとて次のようなシーンをベルは紹介している――シン・ジョン・ハッチンスン夫人は誕生日のパーティを催し、そのパーティにロンドンで最も聰明な男十人と、最も美貌の女十人とを招待し、彼等が顔を合せるように計画した。その十人の男の一人としてエリオットは招待された。晩餐後、来客一同はクラッカ・ボンボンをひいたが、その中には謎々が沢山しこんであつた。ある婦人がそれらの謎々をひそかに集め、知恵試しだといつて大声で読みはじめた。謎々が読まれると間髪をいれずして来客の二人が答えた。一人はJ・M・ケインズ、他はエリオットであつた。A・ハックスリィも招待されていたが、謎々の馬鹿々々しさに腹を立て、彼の偉大な知性のはたらきはある程度妨げられた、さもなければこの知恵試しに於て上記二者と兄たり難く、弟たり難しの争を演じ得たであろうとベルは惜しそうにいつている。

四

芸術の天才といえば、我々は凡俗と隔絶した奔放な人物を想見し勝ちであるが、エリオットは一個の普通、平凡な人間である。既に紹介した如く、チェッキは彼ほど詩人或は芸術家らしからぬ物腰の大詩人を知らないという。彼を親しく知れば、天才は必ずしもひげをたくわえていない、必ずしも狂気じみた恋愛事件をもたない、専門家的な、正しい、豊かな鑑識力をもつてチーズの品質を論じるケンジントンの教区委員の中にも天才は発見され得ることを知

る、とホーキンズはのべている。エリオットはケンジントンの聖スチーヴン教会の教区委員で、その義務を忠実に果しているのである。若い詩人や批評家に「ラッセル・スクゥェアの法王」と思われたエリオットも結局は一個の善良な市民でしかない。そこで、「有難いことには真実は小説よりも奇なり」とホーキンズはさもほつとしたように述懐する。

エリオットの挙措、応待、言語は端正、それが稀有の天才と結びついている——これはベルやウルフの眼には楽しくも滑稽なものとうつり、そのため彼はからかわれ、冗談の種となつた。服装も一分の隙もない。「日曜日に昼飯にいらつしやい。トムが来ます、四つ揃の服で来ますから御期待あれ」というようなウルフの招待状がベルの許によく舞いこんだ。そういう彼であるから、不図あえば、「おや、トムかい、銀行員かと思つたよ」と叫んだろうとベルはいう。

銀行員といえば、周知の通り、彼はかつて銀行に勤めた。この事実を、「これは如何にもエリオットらしい！　如何にも賢明だ！」とベルは評している。大ていの有為な青年詩人はジャーナリズムを相手にやつと口に糊し、果は才能をすりへらし、世の期待にそむく。エリオットはそんなことはしない。昼は銀行で働き、夜は創作に従う。だから彼は無意味な或は不注意な一語も書かない。

銀行に勤める前、一九一五年の春結婚[10]した彼はそれから一年間ロンドンで学校教師をした。一九一五年といえば、*The Love Song of J. Alfred Prufrock* をはじめいくつかの彼の詩篇が公にされた年であり、その新奇の詩風が漸く世の注意をひき、彼自身も詩人としてのうつぼつたる野心に胸をふくらませていたであろうと思われる頃である。その彼が学校教師となり、子供相手にフランス語、ラテン語、初等数学、ドローイング、水泳、地理、歴史、野球等を教えたのである。教師としての地位も usher (= a subordinate teacher or an assistant in a school) であつた。そのような地味な地位にあり、しかも既述の如く、ベッチャマンによれば、生徒に「不愉快な記憶を一つも残さず」に

働き、将来の雄飛をまつたエリオットという人はまことにがつちりとした人間であると思われる。

がつちりしているといえば、こんな話がある。第一次大戦後、エリオットはルーイスとフランス旅行をした。その時ルーイスの驚いたことには、エリオットは一日の支出を細大もらさず書きつける。これはカフェーで寝酒ものみ、もう金を使うことはあるまいという時になつての彼の日課であつた。

寝酒といえば、彼はチーズとともにクラレットが好きである、福原麟太郎教授は人から聞いた話として次のように書いていられる。

エリオットは非常な酒のみだ。飲み出すと際限なく飲む。『魚の如く飲む。』然るに彼は新教から改宗して殆ど旧教に近くいつている人だ……彼は自分の飲酒の罪を神様の前でいかにすべきか。そのもやもやする煩悶と憂慮、そのコムプレックスを主題としたのが今度出た、評判の『コックテール・パーティ』なのだ。それが解らなければ、あの作は解るまい。(「文芸春秋」一九五一年七月号)

ホーキンズはある聖歌隊の少年の言葉を記録している。

エリオットさんはひどいお酒飲みにちがいない。きつと、浴室に入つて錠をおろし、こつそり、ジンをあふり飲むのだ。

こう書いてくると、エリオットは多少常人離れをしているという印象を与えることになりそうだが、私の意図はエリオットの「ブルボン・ウィスキーとバイブルとをならび愛好する人間的な一面」(タイム誌)に注意をひくことにある。

エリオットはまた、シャーロック・ホームズを愛読する。猫を可愛がる。通勤の途上、バスにのつてロンドン・タイムズを開けば、まずクロスワード・パズルを考える。彼は化学の実験を好む。彼の化学知識は深かつたそうであり、彼が出版人となる前の友人は彼の悪臭を放つレトルトをおぼえている。だから、例の「酸素と二酸化硫黄とを含んでいる室に白金の細い繊条をさしこむときにおこる作用」[11]とか、「無韻詩の発達はあの驚くべき工業産物コールタ

ールの分析にたとえられよう」[12]とか彼がいうとき、それは彼にとつてはいわば体験的な比喩であろう。

エリオットにはこのように平凡な、人間らしい一面がある。しかしもちろん、恋をすることとスピノザを読むことを、そしてこれら二つのことをタイプライターの音や料理のにおいと結びつけることのできる普通人ではあろう。

五

エリオットは彼特有の皮肉――謙虚と混淆した皮肉をこのんで用いる。彼が「私は深遠な推理をなす能力がないことをよくわきまえている[13]」とか、「私の心は鈍重で、具体的にしかものを考えることはできない、だから抽象的な、高遠な思索はできない[14]」とかいう時、これを額面通りに、謙虚な告白とうけとることもできようが、また、あなた方は難しい、もつともらしいことをいつているが、実は何も分つていないのではないかと皮肉り、私は七面倒くさい理屈はいわぬが、事の核心はちやんと摑んでいるのだとの主張を含んでいるとも解せられる。如上の言葉を解釈してF・V・モーリィ(Morley)は、エリオットは心中ひそかに、普通のレヴェルを一段と抜いたあるものに対する称讃を期待しているのかもしれないという。そういえば、世界秩序再建を論ずる彼が「私には政治学や経済学を云々する資格はない、特に経済学ときたら数学以上に分らない[15]」という時、彼の謙虚をたたえるのもよいが、政治学的、経済学的立場からのみする論議は何か大切なものを逸してはいなか、私は提示すべきもつと核心的な方法をもつていると自信の程を裏返しにみせているのだとも考えられる。

こういう謙虚と皮肉との混淆したような彼の言説をもつて、彼を快く思わぬ人は彼の不誠実を証明するものとするかもしれない。

彼のこういう面の具体例と思われるものをW・エムプソンがいくつかあげている。ここにその一、二を紹介しよう。あるディナーの席上、さる非常に美しい外交官夫人が、自分は読書が好きです、あまり暇はないが、いつも就床し

てから伝記などを読みます、とエリオットに語つた。すると彼は「手に鉛筆をもつて？」と問うた。夫人がやや気色ばみ、「否」の返事をすると、彼は「もう何をよんでも面白くないということは職業的文人になることの最も重い罰です」といつた。彼のこの言はいろいろに解されようが、エムプソンは、とにかく、エリオットが何をよんでも興味を感じないというのは真赤な嘘だと思つたといつている。

また次のようなこと。エムプソンの学生時代、エリオットは Clark lectures の講師としてケイムブリッジに招れた。ある会合で、プルーストをどう思うかとの一学生の質問に対し、彼はおもむろに「私はプルーストをよんだことがない」と答えた。翌週の同じ会合で、前回出席していなかつた学生が Scott Moncrief のプルースト翻訳をどう思うかと質した。すると、彼はやや長々と、口をきわめてそれを賞讃し、部分的には原作よりすぐれており、全体として与える印象に於ても原作に遜色がないと思うとのべた。

エムプソンはそのとき、エリオットの答の矛盾を解釈して、彼がある作品を「読んだ」というとき、その作品について多くのノートをつくつたということなどを意味するものだと考えた。しかし今ではこの解釈が当つていたとは確信できない、さればといつて、エリオットが学生達に感銘を与えるために嘘をいつたとは思われない、おそらく前回の会合に於ては学生のいうことを聴く気になれなかつたのだろうとエムプソンはいつている。いずれにしてもエムプソンは善意の解釈を下しているが、これをエリオットの二枚舌と解し、彼の不誠実を証明するものとして非難する人があつても致し方なかろう。こういう種類の逸話を彼に反感を抱いている人（Anti-Eliot man）[16]に話してみたら、大ていの場合、それは既に得ている悪印象を裏づけるものとしてうけとられるであろうとエムプソンもいつている。

ここで私はエリオットが一方ならぬ尊敬を払う哲学者F・H・ブラッドリィを論じた次の一節を想い起す。私はそれを本項にのべたような彼の一面を弁護する言葉とも考えたい。

『倫理学研究』は道徳哲学の体系を目ざしたものではないとブラッドリィはいう。『論理学原理』の序文は次の

言葉ではじまる、「本書を論理学の体系的研究と考えてもらいたいとは全然思わない。」『現象と本質』の序文の書き出しは次の如くである、「私は本書を形而上学の試論といつた。それは形式的にも、内容的にも体系と称し得るものではない。」自著の性格を語る彼の言葉はすべてこれと大同小異である。ブラッドリィのポレミカルな皮肉、そういう皮肉を口にすることに彼は明らかに大きな興味をよせていること、無知や、理解力の欠如や、高遠な思索をなす力の欠如を突如表明することによつて論敵をたじろがせる彼の癖、そういうことが念頭にあるから、多くの読者は、自著に対する彼の態度はすべてポーズにすぎない、しかも幾分非良心的でさえあるポーズだと結論した。しかしブラッドリィの精神をより深く研究すれば、彼の謙虚は本物であり、彼の皮肉は謙虚にして、高度の感受性をそなえた精神の武器であることがはつきりとわかるのである。[17]

六

最後に、実務家、就中出版人としてのエリオットについてのべよう。この項は主として、およそ一九二五年から三九年にかけての出版人としてのエリオットについて、彼と共に仕事をしたモーリィが書いているところに拠るものである。

一九二五年頃、Scientific Press が Faber & Gwyer と改称し、一般図書の出版に乗り出すことになつた時、H・ウォールポウルの推せんでエリオットはその一員となつた。それまでの約十年間、彼は銀行に勤め、かたわら文筆の仕事に従つていた。銀行員としても有能であつたようである。彼が Lloyds Bank を辞し、文学に専心することになつた時、シティは一人の有能な銀行家を失つたと信じるとモーリィはいい、且、エリオットは才能をむだ使いした[18]人であり、もしシティにとどまつていたら、高い地位——タイム誌はイングランド銀行の総裁という——に就くことも可能であつたろうとの批評を紹介している。つまり彼は単なる芸術家肌の人ではなく、実務家としても立派に成功し

得る能力と性格とをそなえた人である。

さて出版人としてのエリオットであるが、彼が Faber & Gwyer に入社した、その入社事情に稍意外に思われるところがある。一九二五年頃には彼の文名は相当高かつたであろうと思う人は彼にふさわしい地位は文芸顧問或はそれに類するものであり、実務には直接関係のないものであろうと想うかもしれない。しかし彼は一個のビズネスマンの資格で入社したのである。モーリィによれば、詩人・批評家としてのエリオットの地位は一九二五年の当時に於てすら確立していたわけではない。又、文芸顧問たるには、自らの著作がポピュラーである必要はなく、将来ポピュラーとなる見込のある作家を発見し、奨励する才能をもつているという定評がなければならない。そういう方面の彼の才能を証するものとしては「クライテイィァリァン」があつたわけであるが、この雑誌がまた一般うけのするものでなく、「クライテイィァリァン」といえば、'Golly, what a paper' という調子で、有望な作家を発見する彼の才能は高く評価されなかつた。こういう次第で、一九二五年には Faber & Gwyer は文学上の事柄に関して、彼の判断を尊重し、それに従う特別の理由はなかつたのではないかとモーリィはいつている。それでは出版人としてのエリオットの資質は何であつたろうか。モーリィはこう考える——彼は紳士であつた、教育があつた、忍耐強かつた、うるさい人間を取扱うのに妙を得ていた、魅力があつた、シティで働いた経験があつた。要するに彼は実務人として幾つかのすぐれた資格をそなえていた。彼がこの出版会社に採用されたのはまさに実務人としてであつたのである。就中、銀行の経験があるということがおそらくは彼にとつて最も有利な入社資格であつたろう。

実務人として入社したエリオットはおのれのビズネスに対して完全に忠誠を示し、私心というものはおくびにも示さなかつた。彼は表面冷静であるが、熱狂的な魂の持主である。しかしその熱狂のために会社や同僚を利用したことは一度もなかつた。[19]

一九二九年、会社は改組され、Faber & Faber という新会社となつた。正式の組織の上では彼は普通のディレク

ターの常勤々務から免除されるという規定ができた。この頃までには社の人々は彼を保護したいと思うようになつており、詩人には過度の仕事をさせてはならぬと考えてのことである。しかし一度、新会社の仕事がはじまるや、そういう心づかいは忘れられてしまい、忽ち彼は召使いのように働かねばならなくなつた。彼にはとりわけ取扱いの困難な、またはとりわけ時間を浪費する仕事がおしつけられた。彼の担当の著作家の数は普通のディレクターのそれの一倍半あつた。彼は作家相手の厄介な問題に手をやかねばならなかつた。外国語で書かれた手紙や原稿をよむのは彼の仕事であつた。英語を話せない人の相手もおのずと彼がしなければならなかつた。但し、社内では彼の意見だからといつて盲従されるわけではない。詩についてさえも、その他の事についてと同様、彼の意見は訂正される。しかし誰もが彼の前に頭を下げねばならぬことがある。新刊書の自賛的誇大広告を書くことである。これは拷問にひとしい苦業であるとのことである。そのブラーブを彼は幾千となく、ほかのものを書く時間や精力がなくなる程沢山かいた。

出版人としてのエリオットの性格を描写するには conscientious, scrupulous, careful, attentive 等の形容詞のうちいずれかが必要であるとモーリィはいい、具体例をあげて説明している。

とにかくエリオットはえらそうにもせず、馬車馬のように働いた。いろんな不愉快な仕事に対しても骨惜しみはしなかつた。出版という仕事には喜びもあるが、悲しいこと、苦しいことがいろいろとある。彼はその苦楽悲喜を共にしたのであり、そういうたたかいに超然としていたのではなかつた。

モーリィのつたえる出版人エリオットの姿は一九二五年頃から一九三九年にかけてのものである。その後、彼の地位は更に重きを加えたであろうが、その仕事振りはどうであろうか。それについては詳細を知り得ないが、第二次大戦中、ロンドン空襲のはげしかつた頃には週に二晩、彼は社の屋上に立つた、とタイム誌は報じており、又、詩人としての活躍もさることながら、それに劣らず真剣に、ビズネスとも取つ組んでいる、と彼の近況をつたえている。

註① 一九四八年といえば、エリオットがノーベル文学賞をうけ、O・M・をあたえられた目出度い年であつたが、同年九月二十

六日をもつて彼は第六十回の誕生日をむかえた。日本流にいえば、彼の還暦をことほいで、四十七名の学者、文人等が或は彼との交際の思い出を語り、或は彼をたたえる詩をよみ、或は彼の業績を論評する文字を綴り、これが一冊の書物にまとめられた。*T. S. Eliot: A Symposium* (Chicago, Henry Regenery Company, 1949) がそれである。本稿は大部分この書物によつたものである。

この外参考にしたものは、Nora Wydenbruck の *A Personal Note* (*World Review* November 1949) という一文、「タイム」一九五〇年三月六日号(本稿でタイム誌というのはもつぱらこれをさす)、F. O. Matthiessen: *The Achievement of T. S. Eliot* 及び *Essays* by T. S. Eliot (研究社) の序文等である。

右のような資料の性質上、本稿のエリオットは彼の一側面にすぎぬかもしれないことをことわつておく。

② エリオットは幼少時、マーク・トウェーンの「ハックルベリ・フィンの冒険」を読むことを禁じられた。幼少時から喫煙癖がついたり、物語の主人公のその他の悪習にそまつたりすることを両親がおそれたからではないかと思うとエリオットはいつている。(*Introduction to the Adventures of Huckleberry Finn* by T. S. Eliot London The Cresset Press 1950)

③ ボクシングの練習は、タイム誌によると、大学三年生のとき、Conrad Aikin によると、ハーヴァード卒業後、ソルボンヌに一年学び、再びハーヴァードに帰つてきてから、はじめた。指南役は元ボクシング選手 Steve O'Donnel であり、彼は *Sweeney Agonistes* の主人公 Sweeney のモデルともいわれている。

④ *The Use of Poetry and the Use of Criticism*, p. 103.

⑤ *Essays Ancient and Modern*, p. 169.

⑥ *Selected Essays*, p. 17.

⑦ 原詩では I grow old ... I grow old ...

⑧ Cecchi がエリオットにあつたのは何時のことかはつきり書かれていないが、一九四五年以後であることはたしかであると思う。というのは、その時、Cecchi はエリオットをヴァレリー歿後の最も権威のある現代詩人とみなしていた旨が書かれており、そのヴァレリーは一九四五年に亡くなつているからである。「六十歳に近いエリオット」と本稿ではかいたが、六十歳に或は達していたかもしれぬ。

⑨ これらの学位をえた年については異論もある。*Essays* (研究社) の序文三頁を参照。本稿ではタイム誌に従つた。

⑩ タイム誌によると、結婚の相手はイギリスの画家の娘で Vivienne Haigh という美しいバレー・ダンサーであつた。

⑪ *Selected Essays*, p. 7.

⑫ *Ibid.*, p. 101.

⑬ *The Use of Poetry and the Use of Criticism*, p. 143.

⑭ *Ibid.*, p. 77

⑮ *Essays Ancient and Modern*, p. 114.

⑯ 過去四半世紀の間に於て、エリオットの世代の詩人にして彼ほど対人的態度及び誠実について極端に相反する評価をうけたものはない。(Horace Gregory and Marya Zaturenska: *A History of American Poetry* 1900–1940, p. 413 参照)

⑰ *Essays Ancient and Modern*, p. 46.

⑱ エリオット自身、「詩は人が一生を賭けるに価する仕事ではなく、あほうのたわむれである」という意味のことをいつている。(*The Use of Poetry and the Use of Criticism*, p. 154) もちろんこの言葉は単純に、表面的に解さるべきではなかろうが。本稿の五、を参照。

⑲ こういうエリオットの性格を示すものとして「クライティアリアン」の歴史における一つのエピソードを Morley は紹介している。この雑誌は Lady Rothermere に支援されていたが、その経済的援助が打ち切られ、廃刊の憂き目を見るほかなくなつたことがあつた。エリオットはこの雑誌の価値を自覚し、寄稿家達に対し愛着をもつていた。この雑誌を続けるためにはどうしたらよいか。まず考えられることは勤めている Faber & Gwyer の援助を仰ぐことである。この雑誌には金は大してかからない。社はこの雑誌ほどの重要性をもたないこころみに大金をつかつている。その上、この雑誌そのものの商業的価値は間接的なものであるが、その刊行のために払われる犠牲は償われることはたしかである。従つてエリオットが損をしてでもこの雑誌をひきうけるように社を説服しても少しもおかしくはなかつたであろう。しかし彼は社を自分の個人的窮境の中にひきいれようとするこころみは自分の知る限り全然しなかつたと Morley はいつている。「クライティアリアン」は予想以上に多くの人がその続刊に関心をもつていたから危機を容易に克服した。